

# 家庭科教員養成における教材構成力の育成に関する研究

—バンダナを用いた製作と家族に関わる内容を関連づけた題材構想の分析を通して—

藤井 志保 村上かおり 鈴木 明子 今川 真治  
権田あずさ 中山芙充子 広兼 睦

## 1. はじめに

家庭科教員養成の質を向上させるためには、教科教育、教科内容及び教育実習担当者の三者による連携と役割分担についての検討が必要であり、三者が情報共有をすることで指導改善のための示唆が得られることが、昨年度の本プロジェクトで行った共同研究において明らかとなった。さらに家庭科教員養成課程の学生の授業構想の課題として、教材に対する理解と多様な教材を適切に構成する力が不十分であることが示唆された<sup>1)</sup>。

教材・教具とは、教育の基本的要素である教授者と学習者をつなぐ媒介物であって、教育活動を構想するための主要な要素のひとつである。教材は学習者が一定の教育目標を達成するために選ばれた、教育の具体的内容・文化的素材であり、学習者に刺激として提示されるメッセージでもある。一方、教具とは学習を最も効果的に行わせるために工夫され、使用される教育用具のことであり、各種のメッセージに応じてその提示を可能にするメディア（媒介具）のことである。

家庭科では、教材という言葉が、①教材・教具を示す場合と、②教育内容を示す場合がある<sup>2)</sup>。しかしながら、家庭科の教育内容を教科目標に応じて精選していく場合、①と②は明確に区別する必要もあろう。現在一般的には、教育内容のもつ教育価値をどのように教材化するかという教材作りと、年間にわたるそれらの系列化の重要性が認められている。一方、教材研究は、教科目標に応じて、教育内容を学習対象となる生活素材（教材）に組み換え、さらにその素材を効果的に扱うための手段と道具（教材・資料・教具）を組み立てる作業である。

家庭科教員養成課程において、教育内容と教材をどのように関連づけてとらえさせるかは、教材研究にお

いて重要な課題であるにもかかわらず、今だ未解決の問題であり、その指導の甘さから、教育実習での授業づくりが困難になっている現状は否めない。教育内容に基づいた教師自身の教材研究（上からの教材研究）と、その教材に関する子どもの解釈を教師が的確に把握しておく作業（下からの教材研究）を有効に行い、教材の多面的な意義と、生徒の関心に応じた扱い方を教育実習前に大学生に認識させることが求められている。

本研究では、中学校技術・家庭科家庭分野における内容「A家族・家庭と子どもの成長(1)(2)(3)」と内容「C衣生活・住生活と自立(3)ア布を用いた物の製作、生活を豊かにするための工夫」を関連づけて学習するための効果的な教材とそれを用いた題材構想を、教育実習を終えた家庭科教員養成課程の学生に考えさせ、さらにそれを共通の観点から自己評価させた。その結果を、教科教育、教科内容及び教育実習担当者の三者がそれぞれの立場から評価することによって、大学生の教材に対する理解と教材構成力を分析、検討し、ここにみられる課題を明らかにしたい。

幼小中一貫教育校である三原学園附属中学校（以下、附属三原中学校と表記）家庭分野の3年間の指導計画（題材配列表）においては、幼児とのふれあい体験学習を継続的に展開できる環境の中、2年次の内容Aの学習過程にナラティブ・アプローチの視点を取り入れ、自己の変容と新たな生活の創造を意図した指導を行っている。さらにその学習活動のひとつとして、市販のバンダナ布を使って幼児のためのプレゼントを作るという取り組みを行っている。これらは、本研究で学生に提示した課題、内容Aと内容C(3)アを関連づけて学習するための効果的な教材と、それを用いた題材構想の一例であり、それぞれの学習内容を効果的に習得す

---

Shiho Fujii, Kaori Murakami, Akiko Suzuki, Shinji Imakawa, Azusa Gonda, Fumiko Nakayama, and Mutsumi Hirokane: Fostering the ability to configure teaching materials in teacher training for home economics: Analysis of material conception that associates goods-making using the bandana with the contents related to family

るための教材観をとらえる示唆を与えてくれる事例である。この事例を参考資料として共通に情報提示し、教育実習での体験に基づいて適切な教材やそれを用いた題材構想がどの程度できるようになっているのか、学生自身による自己評価と教科教育、教科内容及び教育実習担当者の三者による客観評価から、その実態を明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

教材構成力に関する調査は、平成25年12月に2回に分けて行った。対象者は広島大学教育学部人間生活系コースで家庭科教員免許取得を目指している3年生で、平成25年9月～10月に、広島大学附属中・高等学校、附属東雲中学校、附属三原中学校、附属福山中・高等学校において、20日間の教育実習を行った15名である。なおこの20日間の実習では、附属校2校において10日間ずつ実習できるように配属している。これにより学生たちは異なった環境で学ぶ生徒を対象に、授業をする機会を得ることができる。なお調査対象者15名のうち7名の学生が附属三原中学校で教育実習を行ったが、これらの実習学生に対し、この題材に関する情報が特別に提供されることがないように留意した。

まず1回目の調査では、附属三原中学校教員（教育実習担当者）が授業で使用したプリントを資料として配布した。その資料を図1に示す。資料の内容は、三原中学校において、8年生が7月の家庭科の授業で幼児のためのバンダナ作りをする授業の流れと、夏休みの課題を示している<sup>3)</sup>。

学生たちには、この内容を参考に、図2-1に示したフォーマットに従って題材の展開を考えるように指示した。また題材に使用するバンダナ（綿100%、54×54cm、資料1に示す）を提示した。フォーマットには生活に役立つもの、誰かが喜ぶもの、生活を豊かにするものをつくる内容を含んで、内容C(3)「衣生活の工夫」と内容A(1)「自分の成長と家族」(2)「家庭と家族関係」(3)「幼児の生活と家族」を関連づけて展開するようという指示を記載した。このフォーマットの作成にあたっては、同家庭科教員養成課程に在籍する家庭科教育学研究室の4年生（3年生で教育実習を履修）に、内容の検討をしてもらった。その際、内容CとA(1)(2)(3)のいずれかあるいは複数を関連づけて考えるという指示がある方が望ましいという指摘があったため、その内容を参考に修正を加えて作成した。題材全体の時間設定については、上限は35時間として考えるよう指示を加えた。

<p>資料① 授業で使用したプリント</p> <p><b>8年生</b> <b>幼児さんのための</b> <b>バンダナ作り</b> <b>～未来へのプレゼント～</b></p> <p>2013. 7. 17 家庭科</p> <p>幼児さんとは春に出会って、運動会の取り組みのダンスなどを共に頑張りました。その幼児さんにバンダナの布のプレゼントをしたいと思います。その目的は次の3つです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●「幼児さんのことを思い浮かべながら、心を込めて、相手の名前や好きそうな絵などを縫い込んだりして、幼児さんが喜んでくれそうな手作りのプレゼントを作る。</li> <li>●布なので耐久性があるものを作り、幼児さんが中学生になったときに調理実習等で使えることを見通した「未来へのプレゼント」とする。将来中学生になった幼児さんが、そのプレゼントの意味を考えることができるものにする。（今は手作りの作品の価値を実感できないかもしれないが、将来これはお兄ちゃんお姉ちゃんに作ってもらったものとして、その時のその子の背中を少しも押すものになればと思う。そして、自分もしてもらった事をまた幼児さんへしていこうという優しい気持ちになってくれたら。）</li> <li>●バンダナの布に、なみ縫いをしたり、刺しゅうをしたりする事を通して、日常の衣服などの手入れができる技能を身につけ、生活に役立てることができるようにする。</li> </ul>	<p><b>本時の授業の流れ</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①バンダナ作りの授業の目的を知る。</li> <li>②先輩たちの作品を見て、どのようなデザインにするかイメージを膨らませることができる。</li> <li>③夏休みにやっておくべき事を知る。</li> <li>④バンダナの布を選ぶ。</li> <li>⑤針に糸を通して、「玉結び」「なみぬい」「玉どめ」をすることができる。</li> </ol> <p><b>夏休みの課題</b></p> <p>★バンダナに「なみ縫い」か「本返し縫い」でできるだけたくさん縫い目を入れて、それをデザインとできるような美しいものにする。</p> <p>最低でも( ) 周はやっておきましょう。</p> <p>★貼ってあるシールをはがさないこと、そのシールにクラス出席番号を記入する。</p> <p><b>資料② 辞件メモ</b></p> <p>学習指導要領とのかかわりこの題材のねらい</p> <p>幼児さんへのプレゼント バンダナを贈ろう～未来へのプレゼント～</p> <p>学習指導要領の文言より</p> <p>C(3)衣生活の工夫</p> <p>ア 布を用いた物の製作を通して、生活を豊かにするための工夫ができる。←(1)のウとの関連をはかり主として補修の技術を生かしてできる製作品を扱うこと。</p> <p>実習で扱う題材については、完成後に活用することにより自分や家族の生活がより豊かになるものを設定する。その際に、生徒が製作の目的を明確に持つことができ、生徒の個性や工夫が生かせるように配慮する。</p> <p>指導にあたっては、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まつり縫いなどの補修の際に学習する技術を製</li> </ul>	<p>作品に取り入れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校で学んだ基礎的・基本的な知識と技能などを発展させ効果的に活用したりして製作ができるようにする。</li> <li>・製作を通して自分や家族の生活を豊かにすることの大切さを実感する。</li> <li>・製作することが「ものを大切にすること」や成就感などを育む。</li> <li>・製作品を活用することが製作や活用の喜びとなる。</li> </ul> <p>A(3) 幼児の生活と家族</p> <p>アイウエ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●この題材を通して生徒に身につかせたい力</li> </ul> <p>①手縫いの基礎的・基本的な技能を定着させ日常生活へ活用することができる</p> <p>本校の生徒の実態では、玉結びや玉どめなどもスムーズにできない生徒が多い。何とかやろうとするがその手つきはおぼつかない。小学校で身につけてきた技能は、多くの場合、繰り返したり日常的に継続して行わないと定着して生活に活かせる力にまでは到達しないように感じる。日常のボタン付けや裾上げなどにも必要な時は親など本人が知らないうちに補修してある場合が多いようだ。</p> <p>②バンダナの製作を通して生徒の個性や工夫を生かし、生活を豊かにする</p> <p>100円均一ショップで購入した安価なバンダナは見慣れた商品である。しかし、それに糸やフェルトなど生徒の考案したオリジナルの模様や相手の幼児さんが喜びそうな絵を刺しゅうしたり名前を糸で縫い付けたりすることで、かなり雰囲気がかかり、それを使用する時に豊かな気持ちになる。</p>	<p>③ものを大切にすることや成就感を育む</p> <p>生徒たちの今の生活や持ち物を見ると、手作りのものは少なく容易に安価に色々なものを購入している。比較的高価なものでさえ記名をせず、残念ながら、なくなってもまた買ってもらえるからいいというのが実態である。</p> <p>その中で、105円の一枚の布が、糸やフェルトなどで手を加えることにより、見た目も工夫されて楽しく使うことができる。そして、その布に相手を思う気持ちが縫い込まれ、そのものの価値が高まることを実感させる。</p> <p>④幼児の発達や生活の特徴を知ったり、幼児への関心を深めかかわり方を工夫できる</p> <p>このプレゼントの製作までに、ペアの幼児さんとふれあって、共に遊んだり運動会でダンスを踊ったりという経験を通して、幼児への理解を深めることができる。</p> <p>また、このプレゼントの製作にあたって、幼児さんの好きな絵を縫い込んだりしながら、幼児への関心も高めることができる。</p> <p>また製作場面へ、幼児さんが幼稚園から見学にきたり、完成したものは直接ふれあって幼児さんへ手渡す。</p> <p>⑤幼児への理解に加えて、子どもが育つ環境としての家族の役割を理解する</p> <p>最終段階でペア幼児さんの親からの手紙をもらうようにしている。その手紙を通して、その幼児さんへの親としての思いや、その子を通じてペアの中学生がどのようにかかわったかなどが伝わっていることが例年分かる。そして改めて、幼児さんの成長にとって家族のかかわり方や家族関係が人の成長にとって大切であるということを実感することができる。</p> <p>このバンダナをプレゼントするときも、幼児さんの親への手紙も中学生が書くようにしている。</p>
--	---	--	---

図1 第1回調査時に配布した資料

教材構成力に関する調査		名前	
<p>実践事例のように、バンダナ(商品 54×54cm)を用いて、生活に役立つもの、誰かが喜ぶもの、生活を豊かにするものをつくる内容を含んで、内容C(3)(衣生活)と内容A(1)(自分の成長と家族)(2)(家庭と家族関係)(3)(幼児の生活と家族)を関連づけた「中学校技術・家庭 家庭分野」の題材展開を考えたいと思います。その題材展開を想定して回答して下さい。</p> <p>① 題材目標(題材全体を通して生徒に到達させたい目標)と、その題材の時間数を考えて書いて下さい。</p>			
		題材全体	時間
教材(教科内容)	思考教材は○	関連の知識・技術を習得しているか 「習得している」として、4, 3, 2, 1の5段階で自己評価	左欄に○を付けた教材を用いて、生徒にどのような学習活動をさせるか、生徒の関心や生活実態への配慮をもちあわせて題材の流れも考えたいとする。赤字の教材名を「 」で示すこと。
技能	玉結び 玉留め なみ縫い まつり縫い ボタン付け はさみ、アイロンの安全な取扱い まち針の正しい打ち方		
素材(布)	布の物性 布の管理特性 布の色・柄		
形	敷く、覆う、包む、入れる等の目的に合わせた形の作り方		
装飾	ししゅう・アップリケ 使う人の好みを考える		
子どもの発達特性	幼児の生理的特徴 発達の順序と個人差 幼児の生活習慣 幼児の発達と遊び		
コミュニケーション	幼児のことばの発達 幼児の遊び道具・玩具		
家族関係	子どもが育つ場としての家族 自分の成長の振り返り 家族とのコミュニケーション・ツール		

図 2-1 教材構成力調査のフォーマット



資料 1 使用したバンダナ

(名前)		
自己評価項目	○ △ ×	考えたこと・できなかった理由・難しかったこと
① 教材目標と関連の中で「指導内容」や「教材」を考えたか。		
② 「教科内容」の範囲とレベルをきちんと理解しようとしたか。		
③ 「教科内容」の中心となる内容と関連的な内容を分けて基本構想を把握しようとしたか。		
④ 「教科内容」を学習するための「教材」として、その適切性を多面的に吟味したか。		
⑤ 教師として「教えない内容を明確にする」作業と、それらによって学習する「生徒のための適切な教材を提出する」作業を整理できたか。		
⑥ 生徒のレイダネス(既習事項、日常生活との関連、習得技能)を考慮したか。		
⑦ 生徒の興味、関心を引き出し、思考させる有効な活動を展開づけることを考えたか。		

図 2-2 自己評価のフォーマット

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
7年 35時間	地域の中の自分 自立をめざして	中学生の食生活と栄養【B-1】				日常食の調理と食品の選び方【B-2】【D-2】				日常食の調理と地域の食文化【B-3】		家庭生活と消費・環境【D-1・2】		
		家族のための食事【生活の課題と実践】				食事づくりに挑戦しよう		交流会に向けて準備しよう		郷土料理 地域の食材 楽しい食会 高齢者の方との交流会		生活を改善【生活の課題と実践】		
8年 35時間	自分を見つめ 共に生きる	自分の成長と家族【A-1】		幼児の生活と家族【A-3】		家庭生活と消費・環境【D-1・2】		幼児の生活と家族【A-3】【B-1 2 3】【C-3】		家庭と家族関係【A-2】		衣服の選択と手入れ【C-1】 自分の成長と家族【A-1・3】		
		絵本の世界へ		おやつ作り【生活の課題と実践】		幼児へのプレゼント作り【生活の課題と実践】		暮らしを見つめて【生活の課題と実践】						
		幼児のイメージマップ	ペア幼児との出会い	幼児の心と体の発達 幼児についての調べ学習	幼児と家族 幼児の食生活	家庭生活と消費・環境【D-1・2】	幼児の食生活 幼児に適したおやつ作り	よりよい 家族関係 家庭と地域のかかわり	手入れと補修 ミシンの使い方 ペア幼児のための小物作り	幼児のふれあいのための今までの自分 これからの自分				
9年 18時間	より豊かな生活 将来に向けて	衣生活・住生活などの生活の工夫【C-1・2・3】【D-1・2】										衣生活の工夫【C-3】		9年間の学びのまとめ【ABCD】
		お気に入りの衣服【生活の課題と実践】		ショートパンツの製作(裁断・しるしつけ・本縫い・仕上げ・着用) 家庭生活と消費・家庭生活と環境										ショートパンツのファッションショー

図 2-3 附属三原中学校家庭科における年間題材配列表

2回目の調査は、1回目から1週間後に行った。調査は、学生各々が構想した題材を記入した用紙(図2-1)を持参し、それをふまえて図2-2に示したフォーマットを用いて自己評価するように指示をした。自己評価項目は、以下に示す7項目で教育実習の手引き<sup>4)</sup>に記載されている内容である。

- ①教科目標との関連の中で「指導内容」や「教材」を考えたか。
- ②「教科内容」の範囲とレベルをきちんと理解しようとしたか。
- ③「教科内容」の中心となる内容と派生的な内容を分けて基本構造を把握しようとしたか。
- ④「教科内容」を学習するための「教材」として、その適切性を多面的に吟味したか。
- ⑤教師として「教えた内容を明確にする」作業と、それらによって学習する「生徒のための適切な教材を見出す」作業を往還させたか。
- ⑥生徒のレディネス(既習事項, 日常生活との関連, 習得技能)を考慮したか。
- ⑦生徒の興味, 関心を引き出し, 思考させる有効な活動を位置づけることを考えたか。

項目ごとに、○そうした、△少しはした、×まったくしなかったの3段階で評価し、○と評価した場合には、具体的にどのようなことを考えたり、行ったりしたのか、また△, ×の場合には、どのような理由でできなかったのかあるいは難しかったのかを記述するように指示をした。

図2-3には、附属三原中学校家庭科における3年間の題材配列表を示した。

### 3. 教材構成力に関する調査結果

#### 3. 1 バンダナ教材を用いた授業構想

学生15名が構想した授業内容について、学生が教えたいと思う教材(教科内容)と、関連の知識・技術を習得しているかについての自己評価の結果を、内容C(衣生活)と内容A(幼児の生活と家族)のそれぞれについて図3-1, 3-2に示す。

図3-1より、内容Cのうち、「技術」の「玉結び」、「玉留め」、「はさみ、アイロンの安全な取り扱い」、「装飾」の「ししゅう・アップリケ」、「使う人の好みを考える」は、多くの学生が教えたいと思った教材であったことが明らかとなった。これらの教材に関する学生の自己評価は高かった。一方、「素材」の「布の物性」、「布の管理特性」について教えたいと回答した学生は少なく、これらに対する自己評価は低かった。

図3-2より、内容Aの中で多くの学生が教えたいと回答した教材は、「子どもの発達特性」の「幼児の発達と遊び」であった。内容Aに関する自己評価には、教材による顕著な違いは認められなかった。

これらのことから、内容Cの「技術」や「装飾」と、内容Aの「幼児の発達と遊び」を関連づけた授業を構想した学生が多かったことが明らかとなった。

内容CとAの両分野について、学生が教えたいと思った教材(○数)の平均は、11.5個(レンジ: 6個~17個)であった。また、学生が構想した題材全体の平均時間は9.9時間(レンジ: 4時間~28時間)であった。○数が最も多かった学生Aは題材全体時間も最も長かったが、○数と題材全体時間との相関係数は0.35であったことから、両者の相関は強いとは言えなかった。つまり、学生が、教えたいと思った教科内容から題材全体の時間数を現実的に見積もることができなかったことが伺えた。

教材(教科内容)	技能										素材(布)				形		装飾			合計(○数)	自己評価平均										
	玉結び	自己評価	玉留め	自己評価	なみ縫い	自己評価	まつり縫い	自己評価	ボタン付け	自己評価	取り扱い	はさみ・アイロンの安全な取り扱い	自己評価	い打ち方	まち針の正しい打ち方	自己評価	布の物性	自己評価	布の管理特性			自己評価	布の色・柄	自己評価	りわけの形に合わせる	包む・縫う・入れる	数多く入れる	自己評価	アップリケ・ししゅう	自己評価	使う人の好み
A	○	5	○	5	○	5	○	4			○	5	○	5	○	3	○	3	○	4	○	3			○	5	11	4.3			
B	○	5	○	5	○	4					○	4	○	5						○	2	○	4			○	4	8	4.1		
C																				○	3	○	4	○	2	○	3	4	3.0		
D	○	5	○	5	○	5					○	5										○	4	○	4	○	4	7	4.6		
E	○	5	○	5	○	5								○	5								○	4	○	4	○	5	6	4.8	
F	○	5	○	5	○	5	○	5	○	5	○	5	○	5	○	3	○	2	○	5	○	5	○	5	○	5	13	4.6			
G	○	5	○	5	○	5	○	5	○	5	○	5	○	5	○								○	5	○	5	○	5	9	5.0	
H	○	5	○	5	○	5					○	5								○	2	○	3	○	2	○	5	8	4.0		
I	○	5	○	5			○	5			○	5	○	5							○	3			○	4	○	5	8	4.6	
J	○	5	○	5	○	4					○	4										○	3	○	3	○	4	○	4	8	4.0
K	○	4	○	2	○	4																○	3	○	3	○	3	5	3.2		
L	○	4	○	5	○	4					○	4									○	4	○	3	○	2	○	4	8	3.8	
M																						○	4			○	3	○	4	4	3.3
N	○	4	○	4	○	4					○	4	○	4									○	4	○	4	○	4	7	4.0	
O	○	3	○	3	○	3			○	2	○	2	○	2										○	3	○	3	○	3	8	2.6
合計(○数)	13		13		12		4		3		11		8				3	3		9		9		12		14					
自己評価平均		4.6		4.5		4.4		4.8		4.0		4.4		4.5		2.7	2.7		3.3		3.8		3.4		4.2						

図3-1 学生が教えたいと考えた教材と各教材に関する知識・技能習得への自己評価(内容C)

教材 (教科内容)	子どもの発達特性							コミュニケーション				家族関係					合計 (○数)	自己 評価 平均		
	特 徴	幼 児 の 生 理 的 自 己 評 価	個 人 差 の 順 序 と 自 己 評 価	発 達 の 順 序 と 自 己 評 価	慣 習 幼 児 の 生 活 習 自 己 評 価	遊 び 幼 児 の 発 達 と 自 己 評 価	幼 児 の 発 達 と 自 己 評 価	幼 児 の こ と ば の 発 達 と 自 己 評 価	幼 児 の 遊 び 遣 い ・ 具 ・ 玩 具 と 自 己 評 価	自 己 評 価										
A	○	4	○	4	○	4	○	4	○	3	○	3					6	3.7		
B	○	3	○	3	○	3	○	3	○	3	○	4	○	4	○	3	8	3.3		
C			○	4	○	4							○	4	○	2	○	3	5	3.4
D					○	4								○	3				2	3.5
E			○	4			○	4						○	4				4	4.0
F			○	4	○	4	○	4											3	4.0
G											○	4	○	4	○	4	○	4	4	4.0
H											○	3	○	2					3	2.3
I	○	4			○	4	○	4	○	4	○	4			○	5	○	4	7	4.1
J	○	3					○	3			○	3					○	4	4	3.3
K	○	3	○	3			○	4						○	4				4	3.5
L					○	3	○	3			○	4			○	4			4	3.5
M					○	4	○	4											2	4.0
N							○	4			○	4							2	4.0
O																○	3	1	3.0	
合計(○数)	5		6		8		11		4		8		4		8		5			
自己評価平均		3.4		3.7		3.8		3.5		3.5		3.6		3.5		3.6		3.6		

図3-2 学生が教えたいと考えた教材と各教材に関する知識・技能習得への自己評価（内容A）

### 3. 2 構想した題材に関する自己評価

学生が構想した題材に関して、7つの自己評価項目ごとに学生が行った自己評価の結果を図3-3に示す。図より、項目⑦について、○と回答した学生が最も多く、次いで、項目①について、○と回答した学生が多かった。これらの項目は、すべての学生が題材構想の際に意識することができた項目であったことがわかった。×と回答した学生が最も多かったのは、項目②であったが、全体的にみると、ほとんどの学生が、すべての項目について意識しながら題材を構想したことがわかった。

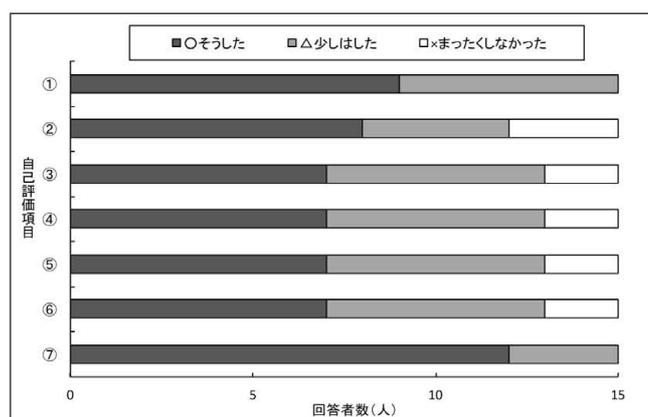


図3-3 構想した題材に対する学生の自己評価

## 4. 授業構想ならびに教材構成本力に対する評価と考察

### 4. 1 家庭科内容学（被服学）担当者による評価と考察

家庭科内容学（被服学）担当者として、図2-1に記載された内容C（衣生活）の教科内容に関する部分を

中心に考察を行う。まず技能については、前項にも示したように「玉結び」、「玉留め」を教えたいと思う教材にあげている学生は、C、Mを除いた13名いた。これらの内容をフォーマットの表中の上部に示したことが起因しているかもしれないが、技能習得教材として位置づけている学生が多かった。今回の題材の流れを考える場合には、やはり8年生の1年間の題材配列を考えることが重要であると思われる。附属三原中学校の8年生では年間を通じて、幼児とのふれあい体験を軸に、自分の成長と家族について考え、そして自分の存在意義を再認識し、家族や周囲の方々への関わり方を学ぶ期間であるにとらえられて、授業が展開されている。その内容を考えると、衣生活の技能の教材は、題材の主軸にすることは考えにくく、その部分を導入に用いることは題材全体への構想の流れとして難しいと考えられる。また技能の中で「はさみ、アイロンの安全な取り扱い」については、C、E、K、Mを除いた11名が教えたいと思う教材として選んでいた。この内容については、他の技能と切り離して考えるのではなく、「玉結び」、「玉留め」、「なみ縫い」などの技能と関連づけて考えられるようにすることが望ましい。ひいては衣生活の内容の技能のみにかかわらず、日常生活におけるさまざまな事象について、安全に対する意識を持つという姿勢が生徒にも定着するように、日々の授業において取り扱うことが重要であると考えられる。近年、その意識と姿勢が定着していない大学生が増加していると思われる。生活体験が乏しく、家庭生活においても安全教育の機会がほとんどなかったと思われる学生もいる。以上のことから安全に対する意識

について、改めて大学において意識付けの必要性があることを再認識した。

素材については、布の物性を教えたいと思う教材として考えていたのはA, F, Mの3名、管理特性はA, F, Jの3名のみであった。しかしその学習活動内容をみると、素材の何を教えたいのかが明記されておらず、バンダナとして用いた布の素材が綿100%であること、その素材が中学生の製作活動に使用しやすい素材であることに言及している人は誰もいなかった。また綿の場合、幼児が使用して汚した場合でも洗濯しやすいことなど、その取り扱いの簡易性について考えた活動はみられなかった。年間計画では8年生の幼児とのふれあい体験の課題として、おやつ作りの題材が取り入れられている。おやつ作りでは幼児の食生活について学習するという目的があるが、おやつのように食べてしまって形がなくなるのではなく、布は時を経ても形が残る。バンダナを教材に用いるということにそのような意義があることを、この素材の項目において考えていた人は見られなかった。

また布という柔軟性を有する素材を用いることで敷く、覆う、包む、入れるといった目的に合わせた形を作ることができる。このことについては、9名が教材として取り入れたいと考えていた。学習活動の中では、バンダナを巾着やお手玉、ランチョンマットなど様々な形にして用いることを構想していた。

装飾については、使う人の好みを考えるという内容をN以外の14名が取り入れていた。これより誰かが喜ぶものを作るという、この題材の目的をほとんどの学生が理解していたことが伺える。

今回の調査を実施して感じたことは、衣生活の分野の中で技能を伴う教材をさまざまな題材の中で関連させて位置づけることが、学生にとって難しくなっているということである。

図2-1に示した教材構成力調査のフォーマットを作成するときの項目順序については、履修の順序を参考に考えたため、技能が先になっている。このことが題材の流れの構想に大きな影響を及ぼしたことは、学生が技能の習得を教えることを最優先にしたことに関係があると考えられる。教育実習に臨むにあたって、学生たちはそれぞれ自らの技能向上の学習に、技能レベルに応じた時間を費やしていた。その結果、技能習得に対する自己評価値は、3年次のアパレル設計学実習時の筆者が評価しているレベルよりも高くなっていた。実習前の学生たちからは、実習で扱う教材に関する技能については完璧に出来るようになっておかないと不安であるという声が多く聞かれた。そのため、不安な学生ほど多くの時間を費やして、技能習得、向上

に勤しんだことが、返って技能に対する意識を高めたのではないかと考えられる。すなわち学生自身も技能について不安があり、またそれを着実に教えることに対し、不安を抱いていたことがおそらく、技能の教育が作業の一つのような位置づけで題材の流れに組み込まれていたことの原因であると考えられる。

このことから、大学での実習の授業の際にも実習が単なる作業にならないよう、一つ一つの技能習得の意義を製作過程の一環のなかで理解できるよう教育する必要があると思われる。

#### 4. 2 家庭科内容学（保育学）担当者による評価と考察

中学校技術・家庭科家庭分野における内容「A家族・家庭と子どもの成長」は、(1)「自分の成長と家族」、(2)「家庭と家族関係」、(3)「幼児の生活と家族」の3項目から構成されている。

本研究では、これらの内容を、「子どもの発達特性」、「コミュニケーション」、「家族関係」の3つの教科内容に再配分して位置づけ、これらの下位項目として9つの教材を設定した。15名の学生が教材として使用した項目数の平均は3.9項目であったが、最大で8項目を使用した学生(B)がいた一方で、最少の学生(O)は1項目のみであり、15名のうち3名(D, M, N)は2項目のみの使用であったことなど、使用された項目数のばらつきは大きかった。

これら9つの教材のうち、もっとも多くが選択したのは「幼児の発達と遊び」で、15名のうち11名が選択していた。中学生にとって身近で、もっとも想起しやすい題材の一つが「遊び」であると考えられることから、この教材が最も多く選択されたのであろう。しかし、「幼児の発達と遊び」の知識・技能の習得状況に関する自己評価の平均値は3.5点であり、決して高いとは言えなかった。「子どもの発達特性」に関連する他の項目、「幼児の生理的特徴」や「発達の順序と個人差」を選択した学生がそれぞれ5名と6名であり、さらには「幼児のことばの発達」を選択した学生が4名のみであったことは、幼児の発達に関する全体的特徴が十分に理解できていないことの表れであろう。幼児の心身の発達を、単純に身体の外形的な成長としてとらえるのではなく、身体成長と運動機能、あるいは認知や言語等が、それぞれどのように相互に関連して発達するかを理解するように、大学の授業の中で指導する工夫が必要であると思われる。

A(1)「自分の成長と家族」の内容構成においては、中学生の「自分の成長の振り返り」を導くことが重要であるが、「自分の成長の振り返り」を、子どもの頃の

食生活と関連させたり(C)、子どもの頃好きだった色を想起させる(D)などという形で使用したものがいた。これは、バンダナ教材をどのように学習活動の中に取り入れるかを模索した結果と考えられるが、「自分の成長の振り返り」は、「家族関係」の中で、「子どもが育つ場としての家族」などと関連させて構想されることが望まれる。「自分の成長の振り返り」を選択した8名のうち、これを「家族」との関連で使用していた学生は3名(B, E, G)のみであった。

その他の項目のうち、15名の学生の半数以上が選択したのは、「幼児の遊び道具・玩具」と「幼児の生活習慣」の2項目のみで、いずれも8名の学生が選択した。このうち「幼児の遊び道具・玩具」については、前述の「幼児の発達と遊び」との関連で使用されることが多かった。他方、「幼児の生活習慣」については、選択した8名の学生の、知識・技能の習得状況に関する自己評価得点の平均値が3.8点であり、9つの項目の中でもっとも高い値であった。しかしながら、「幼児の生活習慣」に関する題材としての使用は、学習活動記述欄にあまり明確に現れているとは言えず、幼児の生活習慣に関する知識をある程度は獲得しており、授業の題材構成内容として重要であると認識してはいるながら、学習活動の中で、それをどのように教材として利用するかが難しい内容の一つであるのかもしれない。

前述した「幼児のことばの発達」と同様、「子どもが育つ場としての家族」も4名の学生しか選択しておらず、知識・技能の習得状況に関する自己評価の平均値はいずれも3.5点で低い値であった。幼稚園や保育園で、幼児とのふれあいをさせる「保育学」実習後のレポートの中に、幼児との言葉によるコミュニケーションの困難さを指摘する学生が多くみられるが、幼児のことばの発達に関する知識の習得が不十分であることが改めて確認できた。子どもの心身の発達は、家族の中であってこそ健全に促されるものであることについて、更に理解を深めさせることが必要であろう。

#### 4. 3 家庭科教育学担当者による評価と考察

学生による自己評価に用いた7項目は、中等家庭科教員免許取得のための必修科目として履修させている「家庭科教材構成論」において、教育実習に向けての教材研究の要点として強調している内容である。その中で、教科目標と教科内容の構造を授業づくりの視点からとらえ、理解を深めるように指導している。その後、「家庭科教育方法・評価論」等で指導方法や評価方法について学ばせる際にも、教科目標と教科内容の構造を意識させながら、よりよい教材とは何かについて考えさせている。このような大学での学習を経て、教

育実習を行った後の学生の教材構成力の実態から、筆者の担当する教科教育学の授業課題を探ってみたい。

今回の調査では、題材の時間設定に自由度を設け、題材目標の表現についても限定しなかったために多様な目標の書き方がみられた。題材名で表現した4名(A, C, G, J)を除いた11名は、評価の4観点を意識した表現によって、内容Aと内容Cを関連づけた到達目標が記されていた。ただし、題材名を記入した4名のうち3名(C, G, J)については、内容Aと内容Cのいずれを核心的な内容としてとらえさせるかが明確に表現されている点で評価できる。

題材時間を4～7時間で構想した者は、内容Aとの関連を考えながら製作(内容C)させることを題材目標としており、小題材としての学習活動をイメージしたと考えられる。一方、8～11時間で構想した者は、内容Aの目標達成のために製作を位置づけ、大題材としての学習活動として表現しようとしたと考えられる。前者も、後者と同様に、内容Cで学習した家族や幼児に関する客観的な理解と、それらの人への生徒自身の思いを深めることを前提として構想したと思われるが、題材構成としての表現は未熟である。しかしながら、他者への視点を組み込んだ製作題材の構想の中で、内容Aと内容Cの関連を図ることも重要な視点である。

このように、1回目の調査における題材目標、題材時間および学習活動の表記から、内容Aと内容Cの関連づけについて二通りの考え方がみられ、両者をイメージできる力が必要であることが明らかになった。また、若干ではあるが、学習活動に見合った適切な時間設定ができない例もみられた。以上のことから、中学校3年間の指導計画の中で、4つの内容を組み込んだ大題材設定の構想を図ることの重要性と、各内容を関連づけた学習の中で習得され育まれた力を継続的に意識させることの必要性を強調することが、教科教育担当者の授業での課題である。

2回目の調査として行った自己評価では、評価項目②③④⑤⑥が同値で評価が低かった。各項目で考えたこと等の自由記述をみると、その自己評価は適切でないと思われる例も多く、自己評価力には個人差がみられた。そこで0点と評価した人数が最も多かった②「教科内容」の範囲とレベルをきちんと理解しようとしたかと、②との関連が深いと考えられる③「教科内容」の中心となる内容と派生的な内容を分けて基本構造を把握しようとしたかの2項目について考察した。いずれも教材構成力の獲得において、教科内容学での学習と密接に関わる要素であり、筆者の立場からみてレベルの高い要素であると考えている。

②については、対象である中学2年生を考慮した「範囲とレベル」を考慮する必要性に自己評価の時点でも気付かなかった者、題材構想の時点から配慮しようとした者、さらに自己評価の際にその視点が甘かったと厳しく自省した者まで、著しいレベル差がみられた。

③については、評価の視点の意図が理解できず学習内容と方法を混同している者もみられた。ここでは、内容Aと内容Cのいずれを中心的な内容ととらえたかということばかりではなく、それぞれの内容の構造をとらえる必要性にも気づいてほしかったが、両方の視点で記述できたのは3名(K, L, O)のみであった。教科内容を構造的にとらえるとはどういうことか、教科教育学の授業でも事例を挙げて具体的に理解させる必要があるが、教科内容学の授業でもこの意識をもたせるようなアプローチが必要である。

#### 4. 4 教育実習指導担当者（附属学校教員）による評価と考察

本稿では、教育実習指導担当者という立場よりも中学校教員として実際に自分が現場で授業を行うという実践性に重点をおき、評価を行うこととした。評価においては、題材に「生活に役立つもの」、「誰かが喜ぶもの」、「生活を豊かにするもの」の内容を含んでいる（図2-1参照）という条件を提示したことから、次のような順序で評価を行った。

- ①「誰か」を誰に設定しているのか、また誰かが「喜ぶもの」は何であるか。
- ②その「誰か」と自分自身とのかかわり（関係）にも注目しながら、そのかかわりから何を生徒に学ばせようとしているのか。
- ③また「喜ぶもの」と「誰か」、「自分」とのかかわりにも注目しながら、その「喜ぶもの」はどのように生活に役立つのか、そこから何を生徒に学ばせようとしているのか。
- ④そして、①～③の「自分」、「人（誰か）」、「もの（喜ぶもの）」がどのような関連性を持って授業内容として実践されているか。学習内容の柱が何であるかをはっきりさせた上で関連させているか。特に、喜ぶものを製作する目的を生徒に実感させる授業になっているか。
- ⑤最終的には、その実践内容がどのくらい「生活を豊かにする」かについて、生徒たちが振り返ることができる題材の配列になっているか。

上記のように「自分」、「人」、「もの」に注目して、「生活を豊かにする」という流れを考えて構想を立てているかという視点で考察した。

評価をして、まず気付いたことは、15名の題材の目

標の書き方が非常に異なっていたことである。内容Aと内容Cという広い範囲の中での題材を構想する場合、まず何を自分が柱とするかを絞り、それに関連させて考えていくことが必要であるが、そのような思考が難しかったように思われる。

幼児について学び、幼児とふれあい、幼児の喜ぶものを製作するという学習活動の場合、製作過程が終わりではなく、この学びを通して生徒たちにはこのように変容してほしいという「めざす生徒像」を持たせることが重要である。すなわち、自分自身を見つめ、自分はこれまでに家族をはじめとする多くの人々に支えられてきたのだということを実感させ、これからの生活における明確な目標にむかって前進していきたいというように、具体的な目指す姿をイメージさせることが必要である。そして、生徒がこれからの生活を展望し、生活をよりよくしようと自分の生活と結びつけて考えられる力こそが、「生活に役立つ」ということであると考えられる。

また、「生活を豊かにする」ことには、生活に関する技能だけでなく、自分以外の他者の立場になって考え実行できるという心的側面が含まれる。このことから「誰かが喜ぶもの」を考えるという活動は、生活を豊かにすると思われる。

次に学生が構想した学習活動内容について述べる。「誰か」というプレゼントの対象者については、15名中13名が幼児を選び、2名(G, O)は家族を選んでいった。「喜ぶもの」は、バンダナをその布のまま活用する（ランチョンマット、お弁当包み、首に巻くなど）5名、バンダナの布で巾着やバックを作る3名、バンダナで布のおもちゃを作る（さいころ、お手玉）5名、コースターなど家族のためのコミュニケーションツールが2名であった。

幼児や家族などの「誰か」と、「喜ぶもの」と「自分」との関連性については、自分の幼い頃を振り返らせたり、家族にインタビューしたり、直接幼児とのふれあい体験を行うなど工夫が見られた。しかし、被服学担当者による評価でも述べられていたように、図2-1の上部に内容Cの技能に関する玉結びなどの項目の記述があったためか、衣生活の技能を学習活動の始めに位置づけている学生もおり、題材の流れが分かりやすく書けている学生とそうでない学生がみられた。

なかでもBの題材の流れは大変優れており、「自分」を深く見つめる導入に始まり、幼児についての学びも確実に取り入れ、バンダナの巾着についても衣生活に関する技能も身につけさせることができるように構成されていた。そして巾着を作る事だけが目的ではなく、それを幼児へプレゼントを通して、幼児と一

緒に遊びコミュニケーションをとるなど、ふれあいのための媒介物としてとらえさせていた。さらには、巾着の中に折り紙を入れるなど、幼児の発達段階を考えて「喜ぶもの」を構想しようという工夫がされている点も高く評価できる。また最後に、学習全体を振り返る活動を位置づけていた。この構想をさらに深めるためには、全体の振り返りの後、自分の成長を振り返ったときの自分（導入時）と学習を終えたときの自分の気持ちの変化を見つめさせる活動を取り入れるとよいと思われる。その過程を経ることにより、この題材の学びが「人」「もの」「自分」を関連づけ、教科目標の達成につながると考えられる。

また題材の構成が、学習者である中学生の生徒たちにとって学習の方向性やゴールが分かり、学びの意欲を喚起するものになっているかという視点から評価した。B, H, J, K, L, Mの学生については、ふれあい体験を振り返る、自己評価をさせる、実践発表会を設けるなどの時間が設けられていた。しかし、他の学生の構想では「誰かが喜ぶもの」を製作する過程はあっても、その効果の有無を検証する、もしくはそれをどのように生活に生かすのかについて明記されていなかった。

大学生が構想した案を評価するなかで、改めて家庭科で学ぶ内容A～Dについては、どのように関連しているかを見極めていく必要性が感じられた。また意図的にどのように関連させると効果が高まるかについて、学校や地域の実態、さらには生徒の発達段階に応じて検証していくことが望ましいと思われる。大学生が、現場で過ごす短い教育実習期間に、その1時間の授業をどのように考案していくかだけでなく、指導の視点として内容A～Dとのかかわりについても広い視野で触れながら指導していく必要があると考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

家庭科教員免許取得を目指している大学3年生を対象に、内容Aと内容C(3)を関連づけて学習するための題材を構想させ、大学での教職および教科関連科目の学びや教育実習での体験に基づいて、適切な教材の選択やそれを用いた題材構想がどの程度可能になっているのかをとらえた。さらにその構想を教材構成力の下位能力からとらえ分析することを試み、学生自身による自己評価と、教科教育、教科内容（保育学、被服学）及び教育実習担当者の三者4名による客観的評価から教材構成力の実態を明らかにすることを目的とした。

その結果、題材目標や構想の表現の未熟さや、取り上げる教材の偏り、すなわち教材構成の視点の狭さは

感じられたが、15名の学生は、何らかの形で内容Aと内容C(3)を関連づけた題材の流れを構想できていた。しかしながら、教材に関する知識や技能が未習得であると感じ、構想における学習活動の要点を明確に記述できていない例や、学習活動に見合った適切な時間設定ができない例がみられた。また、本研究で取り上げた教材構成力の7つの下位能力に関する各項目の自由記述には、要点の理解不足や間違った解釈がみられたりした。また自己評価力の個人差もみられた。さらに、7つの下位能力の中でも、特に家庭科の教材構成力の獲得において重要と思われる「教科内容」の範囲とレベルの理解、及び「教科内容」の基本構造の把握において、15名のそれらの力は全体的に不十分であり、同時に著しいレベル差もみられた。

本研究で学生に提示した課題「2つの内容を関連づけて題材構想すること」は、長年授業実践や教材研究を積み重ねた実績をもつ家庭科教師にとっても、高度で難しい課題と言えるかもしれない。教育実習指導担当者が述べているように、教材構想においては、まず「めざす生徒像」をもつことが重要であり、さらに「生活の豊かさ」の意味を、教師自身が追究し続けていることが求められる。これは言い換えれば、教師が家庭科の教科目標を自分の教育実践に使える形に咀嚼するために必要なことでもある。これらのことは一朝一夕に獲得できるものではない。しかしながら、多様で多岐にわたる教育内容をもつ家庭科では、このことの重要性を教員の資質能力養成の初期の段階で認識させ、指導計画に反映させることが求められている。そのことが必然的に50分単位の授業の質を上げることにつながると考えてよいだろう。

本研究を遂行する過程で、教科教育、教科内容及び教育実習担当者の三者の中でも「教科内容を構造的にとらえる」とはどういうことか、その認識の共有がなされていないことが明らかになった。家庭科教員養成において、教材構成力の向上を図るカリキュラムの改善に取り組むときに、この認識の共有作業は必至である。その際に必要なことは、教科目標を達成する教材構成が可能な専門科学の内容の再構造化である。専門科学からみたそれぞれの内容は並列の位置づけであっても、家庭科の教科目標に照らした場合、いずれかに内包されたり上位下位の関係で捉えられたりする可能性もある。今後三者でその作業を進めていくとともに、各自の授業や指導場面に活かせるようにシラバスの改善にも取り組んでいく必要があるだろう。最終的には、この作業は、家庭科教師として教育現場に立った学生が、子どもを理解しながら教科目標を再考、咀嚼した上で行うことになるが、その場合に、改めて最新の専門科

学の情報を自分で再構造化できるような力を大学で身に付けておく必要がある。

教科教育，教科内容及び教育実習担当者各々の立場で，このことをふまえて，家庭科教員養成のコアカリキュラムの構築に向けて取り組んでいきたい。

#### 引用（参考）文献

- 1) デミール千代，藤井志保，村上千代，鈴木明子，今川真治（2013）「家庭科教員養成課程における浴衣着授業の構想力育成の課題－教科教育，教科内容及び教育実習担当者による学習指導案の評価を通して－」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第41号，pp.99-108.
- 2) 山本紀久子（1992）『家庭科教材開発法』家政教育社
- 3) 藤井志保（2013）「自己の変容を促し，新たな生活を創る 中学校家庭科の題材開発－「幼児とのふれあい体験学習とナラティブ・アプローチ」－」『広島大学附属三原学校園研究紀要』第3集，pp.213-220.
- 4) 広島大学教育学部 中・高等学校教育実習の手引き（平成25年度版）pp.60-63.
- 5) 中学校学習指導要領解説技術・家庭編（平成20年3月）